

JLTA Newsletter No. 53

日本言語テスト学会

The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 53 発行代表者: 渡部良典 2022年(令和4年)9月30日発行
発行所: 日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒036-8560 青森県弘前市文京町1
弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター
横内裕一郎研究室 TEL: 0172-36-2111(代表)
e-mail: u16yoko@gmail.com URL: <http://jlta.ac>



言語テストに正義を？

齋藤 英敏 (茨城大学)

コロナ・ウィルス、気候危機に環境危機、ウクライナ・ロシア戦争、資本主義とグローバリズムの崩壊、覇権主義の台頭と民主主義の弱体化。当たり前だった価値観がひっくり返る2022年を迎えて、言語テスト・評価も危機にあると感じます。それはテストは学習者のためにあるはずなのに、(少なくとも)次の三つの権利を保証できないからです。

間違える権利。テストで誤答は悪です。間違えれば、点数が引かれます。悪い成績がつきます。しかし、関連研究を見ると、中間言語仮説や技能習得理論では、学習者は目標文法システムや技能を構築する道を、たくさん間違えながらゆっくりと歩み続けます。学習者の中間言語のアップデートには、間違えてそれに気づくことは必須です。そのプロセスを歩んでいる学習者を励ますのではなく、テストで罰しているわけです。それが今のテストと成績評価です。それだけでなく、重要なコミュニケーション能力育成の原則であり、英語教室の最優先モットーでもある“Don't be afraid of making mistakes”を教師自らが破ることになります。間違いを「悪いもの」とみなすのが今のテスト・評価です。

自由に学ぶ権利。テストの範囲は学習指導要領、教科書やカリキュラム、あるいは言語・技能習得プロセスの理論などの前提をベースに作られます。例えば中学校3年間の各学年で学ぶ内容、範囲、ペースはあらかじめ決定され、それを選ぶ権利が学習者にはありません。自分の好きなことを、好きなペースで学ぶことはできません。それどころか、K-Popが好きだから、韓国語を、サッカーが好きだからポルトガル語やスペイン語をと思っても選ばれません。好きな言語も選べず、学習内容も、学習ペースも選べません。今私たちは動機づけの理論に全く反する教え方をしてそれを評価しています。

静かである権利。内向的な自分である権利とも言えます。スピーキング・テストでは、発話量が点数に関わります。もちろん正確性も関係ありますが、たくさん話せるかどうかは、能力値を決定づけます。ペアやグループのテストではリーダーシップを取った生徒はスコアが上がります。シャイな生徒、おとなしい生徒はどうでしょうか。点数は上がりません。つまり、そういう性格の生徒はこのテストでは「性格を変えること」を要求されます。本当にそれは必要でし

ようか。シャイでいることは悪いことでしょうか。スピーキング・テストでは、スコアと性格を切り離すことはできません。それは、ありのままの自分、静かな自分でいることを否定する評価です。

この三つの権利を学習者に保証するテストや成績評価は可能でしょうか。間違えても、間違えても何度もチャンスがもらえるテスト。自分の好きなこと（言語・内容）を好きなペースで学び、評価してもらうこと。静かでいてもそれを咎められない、性格を変えなくていいスピーキング・テスト。テストや成績評価なんてやめたほうが早いでしょうか。やめないのであれば、テスト・成績評価 2.0 を作る必要があります。もっと、公正な、学習者を励ます、学習者の自由裁量が許される、新しい価値観に基づく評価にする必要があります。

現段階でテストに正義を求めるのは無理でしょう。テスト・成績評価で「良い」「悪い」の判断を下さないことはできません。そもそも、テストや成績は学びのためより、能力の選別に使用する目的が増大しました。個人の能力を価値づけて利用する、皆が工業製品のように同じ能力を身につけることが、社会発展のための善だと社会が合意して、そのツールとしてテストを利用しているからです。我々は資本主義の原理（能力主義、成果主義、標準化）に完全に犯されていました。地球環境・気候危機、格差・貧困問題という圧倒的な機能不全が、資本主義に修正や停止を要求しています。この合意も当然見直す必要があります。本学会が持続可能で公正な、100 年先まで耐える「正義の学習評価観」を創出する議論の場になることを願ってやみません。なお、本稿の内容は筆者個人のもので、学会の意見を代表するものではありません。

2021 年度日本言語テスト学会 最優秀論文賞

受賞者から

Message from the Recipient of The 2021 JLTA Best Paper Award

受賞者 ALLEN David（お茶の水女子大学）・ 太原 達朗（早稲田大学）

この度、我々の論文“A Review of Washback Research in Japan”が最優秀論文賞に選ばれて大変喜ばしく思います。コメントをくださった査読者の皆様、そして論文賞審査員の皆様に御礼申し上げます。本論文の著者二人は学会にてお互いのウォッシュバックに関する研究発表を聞き、それがきっかけで話すようになりました。その二人がウォッシュバックに関する研究の共著論文で賞を頂けたのは大変感慨深いものがあります。

本研究は 2021 年以前に日本で実施されたウォッシュバック研究を詳細にレビューすることを目的としました。関連するキーワードを基に Google Scholar で検索し、著者二人でヒットした文献を詳細に検討しました。レビューでは最終的に 32 点の文献が採用され、それらを出版物、テスト、文脈と参加者、方法論、ウォッシュバックの内容、結果の 6 種類のカテゴリー別に分類しました。各文献のコーディング結果を示す一覧表は本論文の Appendix にて参照できます。

本論文では複数の観点から過去のウォッシュバック研究をレビューしました。本稿ではその中から論文内で述べた日本におけるウォッシュバック研究の主な特徴を一点紹介します。それは大学入試英語問題に関する研究において、特定のテストではなくテスト一般の研究を実施した研究が多い点です。日

本は各大学が作成する独自試験が多く、受験者は複数の独自試験を受験するのが普通です。そのため、TEAP や IELTS のような特定のテストを対象とした研究が少なく、参加者の「心の中に存在する」一般的な大学入試英語問題のウォッシュバックを対象とした研究が多く存在していました。この傾向は日本人研究者なら暗黙のうちに知っている点かもしれませんが、海外の研究者も参照できるように英語論文の形で記述出来たのは大事だと考えています。

本論文の結論ではレビューの結果を基に、将来のウォッシュバック研究に向けた提言を述べました。第一に、ベースラインデータを用いた長期的な研究の必要性です。つまり、テスト導入前のデータを収集し、テスト導入後と比較できるようにする必要があります。ベースラインデータを収集した研究は国内外ともに少なく、今後新たなテストの導入の是非を議論するためには必須です。また、データ収集する際も参加者に過去を振り返ってもらう後ろ向き研究ではなく、教室や学習を行っている場면을直接収集していく前向き研究が求められます。そのデータも複数のデータ源を複数の方法を用いて収集すれば、強固なウォッシュバックの証拠を発見することに繋がります。今後本論文のレビューを参考に、新たなウォッシュバック研究を実施する研究者が現れるのを著者一同楽しみにしております。

**海外の学会・研究会
参加報告
World Conference Reports**

LTRC 2022

報告者 深澤 真 (琉球大学)

大会： Language Testing Research Colloquium (LTRC) 2022

開催日： 2022年3月7日～3月11日

テーマ： Linking Assessment to Language Learning and Teaching

開催地： オンライン (東京)

2022年3月7日～11日まで第43回 Language Testing Research Colloquium が行われた。今年も昨年に続き、コロナ禍の影響によりオンライン開催となった。今年の大会のテーマは、“Linking Assessment to Language Learning and Teaching”で、この研究領域への意識は近年高まっており、言語評価をどのようにより良い言語教育につなげることができるのかを考える良い機会となった。

3月7日のワークショップから学会が始まり、3月8日にはオープニングシンポジウムが開催された。筆者もオープニングシンポジウムに発表者の一人として参加したが、スピーキングやライティングの Classroom assessment に焦点を当て、教育現場での具体例を示しながら、学習志向の評価のあり方についての議論が活発に行われた。3月9日に開会式が行われ、その後、研究発表、講演、シンポジウムなどが3月11日まで5日間にわたり行われた。多くの発表やシンポジウムが学習者の言語学習を改善するために評価がどのように貢献することができるのかについて示唆を与えるものであった。また、講演はテストングにおける最新の理論や研究方法、妥当性などについて情報に富むものであった。

今年の LTRC の特徴は、オンライン学会のプラットフォームとして Whova を中心に、Zoom と Wonder.me の3つを使用したことである。Whova は学会中に与えられた時間内の Q&A などに使用され、Zoom はミーティングやシンポジウムなどで活用された。さらに Wonder.me は、発表者と他の参加者が自由に交流することができるバー

チャル空間として活用された。コミュニケーションテクノロジーにやや疎い筆者にとっては3つのツールを使いこなすのに戸惑いもあったが、日本に居ながらにして世界中の研究者の最新の発表を聞き、交流を深めることができた。オンライン学会のメリットや今後のさらなる可能性を感じさせる大会であり、言語教育と評価をどのように繋げていくべきかについて示唆を与えてくれる大変有意義な大会であった。

**Report on
The 54th JLTA Research
Seminar**

Mar. 30 (Wed) ,2022

SHIBUYA SPACE Room 303

「ディクトグロスの実践と評価への応用の可能性」

2022年3月30日(水)に「渋谷スペース」にて第54回日本言語テスト学会研究例会が開催されました。テーマは「ディクトグロスの実践と評価への応用の可能性」で、講師は金沢星稜大学の前田昌寛先生がお勤めになられました。

音声を一語一句書きとるディクテーションとは異なり、ディクトグロスでは、学習者は音声を聴きながら「大切だと思う語」だけのメモをとり、その後、ペアやグループメンバーと話し合いながら元の文を復元します。研究会の前半では、前田先生のご著書『「ディクトグロス」を取り入れた英語力を伸ばす学習法・指導法』を基に、ディクトグロスの研究に入られるきっかけとなった高校教諭時代のエピソードやディクトグロスの有用性を示すこれまでの研究結果などが紹介され、後半は、参加者3名が学習者側となり、前田先生によって日本人学習者向けにアレンジされた「教育的配慮に基づいたディクトグロス」による学習を実際に体験しました。

ディクトグロスは、(1) Dictation, (2) Reconstruction, (3) Analysis, correction, discussion, (4) Reflection, (5) Optionの5つのステージを経て学習されますが、その過程でフォーカス・オン・フォーム、協同学習、ボトムアップ処理、アクティブラーニング、形成的評価、ポートフォリオなど、様々なキーワードと結びつく処理や活動、評価などが行われることをこの研究会で学びました。また、自らディクトグロスを体験し、認知負荷の程度や活動にかかる時間、声かけの工夫などを理解することができ、自らの授業への応用に向けて有益な時間となりました。

この研究会に参加した動機は、日頃から授業内でディクテーションを頻繁に行っているものの、活動が受動的になりがちで受講学生間のインタラクションに繋がらないため、ディクトグロスがそれらの解決の一つになるのでは、と考えていたからでした。今回の研究会参加をきっかけに、実際にディクトグロスを授業に取り入れ始めましたが、ディクトグロスの各ステージを上手くこなすことができる学生とそうでない学生がいるように感じています。その要因が何なのか、前田先生の今後のご研究で明かされることを期待しております。

研究会では、前田先生のご著書をご恵贈頂きました。ご著書では、理論だけでなく、様々な教育的配慮に基づいた実践例や生徒によるリフレクションなどが数多く紹介されています。私のように、ディクトグロスの導入を検討している者にピッタリの内容です。ありがとうございました。

報告者 大塚賢一 (名古屋短期大学)

書評
Article Reviews

『実例でわかる英語スピーキングテスト作成ガイド』

小泉理恵 編著

2022年 大修館書店

本書は小中高大の幅広い校種を対象に、スピーキング力を向上させるテストの導入方法について、理論・実例に基づいて詳しく解説している。近年の英語教育では、コミュニケーション能力の育成やスピーキングへの関心が一層高まっている。しかしながら、スピーキングが発表とやり取りの2つの領域に分けられ、異なる観点から評価を行わなければならない現状があるなど、スピーキング評価についてまだまだ改善の余地が必要であると思われる。他の技能と比べてスピーキングテスト（Speaking Test: ST）の実施は特に困難で敷居が高いと思われるが、本書を読むことで、テストの理論に裏付けられた実践的なアドバイスや、具体的なルーブリックやテストマテリアルなどの情報を得ることができるだろう。

本書はテスト添削編、理論編、実例編の3部で構成されている。第1章のテスト添削編では、小中高で実際に行われてきたSTを例に、実施方法やルーブリックなどの改善案を提示している。添削前と添削後のSTを比較することで、ST実施者が注意すべき点が明確に示されている。第2章の理論編では、多くの先行研究を紹介しながら、テストや言語評価の理論について説明が詳細に述べられている。QA方式で進んでいくため、テストについての背景知識が十分でない読者でもスムーズに読めるようになっている。さらに、テスト後に行うフィードバックの重要性も強調されており、テストの一連のプロセスである「指導と評価の一体

化」を目指す教員には有益な一冊である。第3章では、学習指導要領に基づく評価の3観点（「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」）に則した実践例を豊富に紹介している。それぞれの実践例について、読者は掲載されているQRコードを通して実際のSTの様子を動画で視聴できる。この機能は、従来のテスト関連の書籍には無かったものであり、本書の特筆すべき特徴の1つである。実際のSTの様子を見ながら評価に関する説明を読むことで、より実践例の理解を深められる。また、STを実施する際には、この発話データを教員間で共有することで評価者間トレーニングも容易に行えるだろう。

各章末には、コロナ禍におけるSTの実施や、ICT機器を用いたST時の注意点、大規模STの運用方法などについてまとめたコラムも充実しており、時宜にかなった書籍と言えるだろう。私自身も、非常勤先でSTを実施する際には、各章で紹介されている内容に加えて、これらのコラムの内容も参考にさせてもらっている。

また、本書は教員だけでなく、テストや言語評価に関心のある学部生や大学院生にも非常に有益な一冊である。本書には実践例の発話データを示すQRコードだけでなく、引用文献をまとめたQRコードも掲載されており、第2章の理論編においても多くの先行研究を紹介している。特にスピーキング評価に関する先行研究について網羅しており、テストの理論について深めるための入門書としても活用することができる。私自身もテストや言語評価に関心のある大学院生の1人であるため、本書を通して多くのことを学んでいる最中である。また、ST以外のテストについて更に知りたい学部生や大学院生には関連書籍である『実例でわかる英語テスト作成ガイド』を、テストについてより理解を深めたい場合には『英語4技能テストの選び方と使い方—妥当性の観点から—』も参照されたい。これらの書籍も合わせて読むことで、基礎的な理論について更に深い理解が得られるだろう。

本書は、教員の方々には ST を実施するためのガイドブックとして、テストや言語評価に関心のある学部生や大学院生には理論と実践を深めるための入門書として、幅広い読者のニーズに応えた書籍となっている。本書は英語教育に従事する方々が手元に置いておくべき必読書であると感じる。

評者：久保佑輔（筑波大学大学院生）



JLTA の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

- (1) 2022 年 11 月 5 日（土）～6 日（日）に第 25 回全国研究大会はオンラインで開催されます。会員の方は無料で参加できますので、ぜひご参加ください。
- 開催日：2022 年 11 月 5 日(土)～2022 年 11 月 6 日(日)
- 実施形態：遠隔(Zoom)
- 第 1 日目 11 月 5 日（土）： ワークショップ【遠隔】
- <時間>
13 時 00 分～16 時 30 分（休憩含む）
- <タイトル>
「日本語教師に求められる『評価リテラシー（Language Assessment Literacy）』とは？－健全な（公平で公正な）評価を目指すために－」（仮）
- <講師> 伊東祐郎氏（国際教養大学）

<使用言語> 日本語

<ワークショップ参加費> 無料

第 2 日目 11 月 6 日（日）：基調講演・シンポジウム・研究発表・実践報告等

<大会テーマ>

Teaching, Learning, and Assessment in CLIL

<基調講演>

講演者： Dmitri Leontjev 氏（ユバスキュラ大学・フィンランド）

タイトル： Assessment, teaching, and learning in CLIL: Challenges and opportunities

<シンポジウム>

テーマ： Teaching, learning, and assessment in CLIL: National and International perspectives（仮）

コーディネーター： 池田真氏（上智大学）

“Cognition and Language Integrated Assessment in the Soft CLIL classroom in Japan”（仮）

パネリスト： Yuen Yi Lo 氏（香港大学）
“Assessment literacy of CLIL teachers”（仮）

パネリスト： María Luisa Pérez Cañado 氏（ハエン大学、スペイン）
“Teaching, Learning, and Assessment in CLIL: What’s the European Story?”（仮）

パネリスト： Rachael Ruegg 氏（ヴィクトリア大学ウェリントン、ニュージーランド）
“Assessment in full-degree EMI programmes in Japan”（仮）

<参加費>

会員：無料，未会員：1000 円

- (2) 2022 年度の研究例会は現在計画中です。詳細が決まり次第、HP にてお知らせします。
- (3) 『**日本語テスト学会誌**』第 25 号は今冬発行予定です。学会誌の論文等は、J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>) にて同時期に一般公開されます。
- 『**日本語テスト学会誌**』は、狭義のテストングに関するものだけではなく、広く評価に関する論文を募集しています。教育実践やプログラム評価に関するものなど、評価全般に関わる実験・知見を含みますので、どうぞふってご応募ください。
- (4) 日本語テスト学会では、2019 年度より「**オンライン投稿審査システム**」を導入しました。このシステムは、2014 年度から学会業務の一部を委託してきた国際文献社が持つもので、投稿と査読の過程がオンライン上に記録されます。さらに、学会誌の一層の質の向上を目指して、既に出版された論文のデータベースを使った投稿論文の剽窃の確認や、著者による論文の匿名化の再確認もシステムの中で行います。2023 年度もこのシステムを使って投稿を受け付けます。詳細は、次の通りです。

オンライン投稿審査システムに関する詳細

1. システムのウェブサイト
<https://iap-jp.org/jlta/journal/login>
2. 次回投稿期間
2023 年 4 月 7 日～2023 年 5 月 7 日
この期間しか投稿ができませんのでご注意ください。
3. 学会誌執筆要領・テンプレート
最新の執筆要領やテンプレートをご参照ください。

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62

4. 問い合わせ先
日本語テスト学会誌 編集事務局
jlta-edit@bunken.co.jp
- (5) **JLTA 研修講師派遣事業**が2017 年度から始まりました。本事業は、テスト利用・作成に関わる研修を行う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うものです。2020 年 4 月に講師リストの更新が行われました。詳細は下記 URL からご確認ください。会員の皆様におかれましては、言語テストングにご興味のある方々へご周知くださいますようお願いいたします。ウェブサイト：
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1154
- (6) **J-STAGE** (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>) における『日本語テスト学会誌』の**アクセス状況**(2021 年 8 月～2022 年 7 月) について報告します。上記期間の PDF ファイルへの総アクセス数は 10,660 件であり、前回の報国寺 (14,239 件) と比較して減少しておりますが、これは最新号の J-stage へのファイルアップロードが例年に比べて遅れたことが原因であると思われます。今後はアップロードを業務委託先である国際文献社に委託することとなりましたので、冊子発行と同時期に自動で公開されるようになったため、より正確なデータをお示しできることかと存じます。一方、一昨年度と比較すると、アクセス件数の差は 1,000 件程度に収まっており (一昨年度：11,695 件)、一定のアクセス数は維持できており、学術的な貢献ができていると考えて良いと認識しています。

ダウンロード先とアクセス回数

旧：2020/08～2021/07				
	国名	書誌事項	国名	PDF
1	アメリカ	2628	カナダ	5028
2	日本	2483	日本	3277
3	中国	1028	アメリカ	2606
4	トルコ	789	中国	483
5	ドイツ	399	イギリス	322
6	フランス	154	トルコ	303
7	イギリス	146	フィリピン	236
8	ロシア	138	フランス	209
9	韓国	120	チリ	171
10	シンガポール	88	スウェーデン	166

新：2021/08～2022/07				
	国名	書誌事項	国名	PDF
1	アメリカ	3280	日本	3367
2	日本	2213	アメリカ	2702
3	中国	929	ドイツ	885
4	カナダ	726	中国	632
5	ドイツ	655	ロシア	250
6	イギリス	217	カナダ	239
7	ロシア	213	イギリス	214
8	香港	197	フィリピン	201
9	韓国	194	インド	184
10	フランス	145	フランス	161

(7) 本学会ウェブサイトには、Web 公開委員会
が公開を進めてくださった、**チュートリアルと
ワークショップ・ビデオ**があります。どうぞ活用
ください。

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

チュートリアル (Tutorial, 日本語)

・「よい」テストの条件 (What is a 'good'
test?: validity, reliability, and
practicality)

- ・テストの構成概念 (The concept of test constructs) Revised
- ・テスト細目 (Test Specification)
- ・リーディングテスト (Testing Reading-6 basic test formats-)
- ・リスニングテスト (Testing Listening)
- ・ライティングテスト (Testing Writing)
- ・スピーキングテスト (Testing Speaking)
- ・語彙・文法テスト (Testing Vocabulary & Grammar)
- ・測定の標準誤差 (Standard Errors of Measurement)
- ・効果量とは? (What is the 'Effect Size'?)
- ・学習に役立つテスト結果の報告 (Test result reporting to enhance learning)
- ・古典的テスト理論 (Classical Test Theory)
- ・確認的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis)
- ・メタ分析 (Meta-Analysis)
- ・質的方法 (Qualitative Methods)

ワークショップ・ビデオ (主に日本語)

- 2014
- ・Workshop 1 - CAT の基本的な考え方 (スライド)
 - ・Workshop 2 - J-CAT (スライド 1, スライド 2, スライド 3)
- 2015
- ・Workshop 1 - テストデータ分析入門 (in English)
 - ・Workshop 2-1 - 生徒の力を伸ばす定期テストの作り方—妥当性と信頼性に留意して (スライド)

・Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (スライド)

2016

- ・Workshop 1-1 初めて学ぶ効果量－入門編 (スライド)
- ・Workshop 1-2 初めて学ぶ効果量－理論編 (スライド)
- ・Workshop 1-3 初めて学ぶ効果量－実践編 (スライド)

2017

- ・Workshop – テキストマイニングを使った自由記述式アンケートの分析

2019

- ・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用 (前半)
- ・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用 (後半)
- ・配布資料

2021

- ・JLTA 2021 Workshop – 自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際 (前半)
- ・JLTA 2021 Workshop – 自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際 (後半)
- ・配布資料

(8) JLTA 著作賞の推薦について

JLTA では 2020 年度より「JLTA 著作賞」の表彰を行っています。推薦図書がある場合は、以下のページにある規程・テンプレートをご確認・ご記入の上、著作賞選考委員長へ送付ください。送付先につきましても、以下リンクをご参照ください。

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618

(9) その他

- 会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>)」はご利用いただいておりますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください

(<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>)。マイページ内の会員向けページにおいて、ジャーナル・ニュースレター等の掲載があります。

- 所属や書類発送先など登録情報に変更がある場合、マイページでの登録情報の変更を3月末までお願いいたします。学生会員の方には、毎年学生証のコピーをご提出いただいております。**2022 年度会費の納入書送付書のうち、数件が事務局・国際文献社の窓口に戻送されております。会員情報に変更があった場合には、必ず MyPage から情報を更新いただくようお願いいたします。**

- JLTA の各活動は会員の皆様から頂戴した会費によって成り立っております。ご協力いただきありがとうございます。**2022 年度の会費納入状況は例年と比較して低い水準となっております。何卒会費のお振込がまだの方はお支払いいただきますようお願いいたします。**

- 2021・2022 年度の会費振込について、これからの方は早急によろしくお願いいたします。2021 年度分のお支払いがない場合には、2023 年 4 月より送付物の発送や電子メールの配信がなくなり、マイページの使用もできなくなります。

- 直近 2 ヶ月の間にメールを受信していない会員の方は、JLTA のメールがスパムメール扱いになっていないかご確認ください。

● 本会の退会を希望される方は、事務局 (jlta-post@bunken.co.jp) へご連絡をお願いいたします。

文責：

JLTA 事務局長 横内裕一郎 (弘前大学)

JLTA 事務局次長 藤田亮子 (順天堂大学)

久保田恵佑 (福島県立医科大学)

前田啓貴 (松山大学)

日本語テスト学会 (JLTA) 公式

Twitter アカウント: @JLTA_official

https://twitter.com/JLTA_official

Messages from the Secretariat

We are thankful for your support of and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you may have. Please see our English website for more details:

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=599

(1) The 25th Japan Language Testing Association Annual Conference (JLTA 2022) will be held online on November 5-6, 2022. Members are welcome to attend the conference free of charge.

Dates: Saturday, November 5 and Sunday, November 6, 2022

Venue: Online (Zoom)

Day 1 (November 5): Workshop

<Time>

13:00 to 16:30 (with a break)

<Venue>

Online

<Title>

"What is language literacy for Japanese language teachers?"

<Lecturer>

Prof. Sukero Ito (Akita International University)

<Language of instruction>

Japanese

<Attendance fee>

Free

Day 2 (November 6): Keynote speech, symposium, paper and practice presentations

<Venue>

Online (Zoom)

<Conference theme>

Teaching, Learning, and Assessment in CLIL

<Keynote speech>

Speaker: Dr. Dmitri Leontjev (University of Jyväskylä, Finland)

Title: Assessment, teaching, and learning in CLIL: Challenges and opportunities (tentative)

<Symposium>

Theme: Teaching, learning, and assessment in CLIL: National and International perspectives (tentative)

Coordinator: Prof. Makoto Ikeda (Sophia University, Japan)

Cognition and Language Integrated Assessment in the Soft CLIL classroom in Japan (tentative)

Panelist: Prof. María Luisa Pérez Cañado (University of Jaén, Spain)

Teaching, Learning, and Assessment in CLIL: What's the European Story? (tentative)

Panelist: Dr. Yuen Yi Lo (University of Hong Kong, China)

Assessment literacy of CLIL teachers (tentative)

Panelist: Dr. Rachael Ruegg (Victoria University of Wellington, New Zealand)

Assessment in full-degree EMI programmes in Japan (tentative)

<Attendance fee>

JLTA member: free

Non-JLTA member: 1,000 yen

(2) The research meeting for FY2022 is currently being planned. Details will be posted on our website as soon as they are finalized.

(3) Vol. 25 of the JLTA Journal will be published in this winter. This volume will be uploaded to J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>), along with that of the previous volumes.

The JLTA Journal invites various contributions. It includes studies related to evaluation in a broad sense, such as classroom-based practice and program assessments that deal with issues and topics pertaining to testing and assessment.

(4) We introduced an “Online Submission and Review System” from the academic year 2019. This system is organized by the International Academic Publishing

Co., Ltd., which JLTA has commissioned part of JLTA’s administrative work since 2014. Within this system, all submission and review processes will be recorded online. Furthermore, to improve the JLTA Journal’s quality, submitted manuscripts will be checked for plagiarism using a database of published articles and for anonymity using human resources.

Details about JLTA Online

Submission and Review System

1. Website

<https://iap-jp.org/jlta/journal/login>

2. Submission period for 2023

Submissions are accepted only during the following period:

April 7, 2023 to March 7, 2023

3. Guidelines pertaining to contributors and templates

Please find the latest guidelines and templates for contributors. You can find them at the following URL.

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62 for details.

4. Contact information of the JLTA editing office:

jlta-edit@bunken.co.jp

(5) In 2017, we started **the JLTA Training Lecturer Dispatch project** with the aim of sending a JLTA

lecturer to institutions and organizations to conduct training sessions or meetings pertaining to test development and use. The list of lecturers was last updated in the month of April, 2020. Please feel free to convey this information to those who may be interested or for whom it may be relevant.

Website:

<http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

(6) J-STAGE

The number of visits to the JLTA Journal on J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>) by country (August 2021 - July 2022) is reported below. The total number of times that PDF files were accessed from August 2021-July 2022 was 10,660, which is less than the number in the previous report (14,239). However, this may be due to the delay in uploading files to J-STAGE for the latest issue compared to previous years. Uploading the article files will now be outsourced to a subcontractor, International Academic Publishing Co., Ltd., so that the article files will be published at the same time as the printed version, which should allow us to present more accurate data. On the other hand, compared to 2020, the difference in the number of times PDF files were accessed is only about 1,000 (11,695 in the year before last).

Furthermore, we can consider that our academic contribution has been made since a certain number of accesses have been maintained.

Download destination and number of accesses

old : 2020/08~2021/07

	county	Bibliographic items	Country	PDF
1	USA	2628	Canada	5028
2	Japan	2483	Japan	3277
3	China	1028	USA	2606
4	Turkey	789	China	483
5	Germany	399	England	322
6	France	154	Turkey	303
7	UK	146	Philippines	236
8	Russia	138	France	209
9	Korea	120	Chile	171
10	Singapore	88	Sweden	166

new : 2021/08~2022/07

	Country	Bibliographic items	Country	PDF
1	USA	3280	Japan	3367
2	Japan	2213	USA	2702
3	China	929	Germany	885
4	Canada	726	China	632
5	Germany	655	Russia	250
6	UK	217	Canada	239
7	Russia	213	UK	214
8	Hong Kong	197	Philippines	201
9	Korea	194	India	184
10	France	145	France	161

(7) Our website has various useful contents for the public. It is our Web

Publication Committee that is responsible the creation or organization of content. Since some of the content posted is in English, we hope you use them to the fullest.

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL Tutorial (in Japanese)

- What is a “good” test?: Validity, reliability, and practicality
- The concept of test constructs Revised
- Test Specification
- Testing Reading-6 basic test formats-
- Testing Listening
- Testing Writing
- Testing Speaking
- Testing Vocabulary & Grammar
- Standard Errors of Measurement
- What is “Effect Size”?
- Test result reporting to enhance learning
- Classical Test Theory
- Confirmatory Factor Analysis
- Meta-Analysis
- Qualitative Methods

Workshop Videos

- 2014 (in Japanese)
- Workshop 1 – Basic Concepts of CAT
 - Workshop 2 – J-CAT
- 2015
- Workshop 1 – Introduction to Test Data Analysis (in English)

- Workshop 2-1 – How to Develop Tests that Improve Students’ English Proficiency (in Japanese)
- Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students’ English Proficiency (in Japanese)

2016 (in Japanese)

- Workshop 1-1 – Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Beginning Guide)
- Workshop 1-2 – Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Theoretical Guide)
- Workshop 1-3 – Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Practical Guide)

2017 (in Japanese)

- An Analysis of Free Descriptive Questionnaire by Text Mining

2019 (in Japanese)

- Bayesian Statistics and its Application to Foreign Language Education Study
- Handouts

2021 (in Japanese)

- Practice of Junior High School Foreign Language (English) Classes for Developing Autonomous Learners

(8)Recommendation for the JLTA Book Award

JLTA commenced the "JLTA Book Award" event in 2020. If there is book

you want to recommended for the award, please check and fill out the rules and templates on the following page and send it to the Chair of the Book Award Selection Committee. Please refer the link given below for the shipping addresses.

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618

(9)Other Information

- Have you visited the “My Page” site (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>)? This is the page where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment status. Please contact us via

<https://www.bunken.org/jlta/mypage/>

Contact if you need your membership number and password, which are necessary details for the login. You can access the recent *JLTA Journals*, previous newsletters, and other materials specifically meant for the members via the “My Page” site.

- If there are any changes in the affiliation, address, and other information that need to be carried out, please update your registered information on “My Page” by the end of March. We annually send student members a message asking them to submit a copy of their student certificate.

- **Some of the letters concerning the 2021 membership fee payment**

have been returned to the secretariat/the International Academic Publishing Co., Ltd. If there is any change to be made in your membership information, please be sure to update it via My Page.

- Each activity of JLTA is a result of the membership fees received from members. We appreciate your cooperation. **The membership fee payment status for 2021 is lower than usual. If you have not paid the membership fee, it is our humble request to please pay it.**

- If you have not yet paid the yearly membership fee for 2020 and 2021, please do so at your earliest convenience. If you fail to pay the fee for 2020, you will receive no shipment or email message from JLTA and will not be able to use the “My Page” site after April 2022.

- If you have not received emails from JLTA for the last two months, it is because your email accounts might have classified our emails as spam. If this is the case, please check the settings of your email account.

- If you are planning to leave JLTA, please let us know by sending a message to jlta-post@bunken.co.jp.

JLTA Secretary General

Yuichiro YOKOUCHI

(Hirosaki University)

JLTA Vice Secretary General

Ryoko FUJITA (Juntendo University)
Keisuke KUBOTA (Fukushima Medical University)

Hiroki MAEDA (Matsuyama University)

JLTA Official Twitter account:

@JLTA_official

https://twitter.com/JLTA_official



日本語テスト学会事務局

〒036-8560 青森県弘前市文京町 1

弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター

横内裕一郎研究室（郵送時には必ず研究室名を明記してください）

TEL: 0172-36-2111（代表）

e-mail: u16yoko@gmail.com

URL: <http://jlta.ac>

編集： 広報委員会

委員長 古賀功（龍谷大学）

副委員長 土平泰子（聖徳大学）

委員

笠原究（北海道教育大学旭川校）

長沼君主（東海大学）

宮崎啓（東海大学）